

はじめに

本書は、南アフリカ出身の白人作家ジョン・マクスウェル・クッツェー (John Maxwell Coetzee, 1940-) の作品から『夷狄を待ちながら』(Waiting for the Barbarians, 1980) と『恥辱』(Disgrace, 1999) を取り上げ、著者の思索を追う。二〇〇三年のノーベル文学賞は「非常に多くの形で、アウトサイダーの驚くべき関わりを描く」という評のもとにクッツェーに授与された。ここで「アウトサイダー」とは他者性を指し示す語であるだろう。たしかにクッツェーの作品はさまざまに「他者」との関わりを問題にしている。しかも作品の多くは抑圧者の視点において語られ、他者に対する暴力の根源を自らのなかに掘り起こそうとする内省的な姿勢が見出される。こうした点はいうまでもなく、南アフリカの特にアパルトヘイト時代を白人として――すなわち抑圧者の一員として――生きたクッツェーの半生に起因しているだろう。結果的に彼の作品は常に

倫理と向き合うことになる。

本書もまたクツツエー作品が示す他者の問題に関わっている。本書の特徴の一つは一定の先行研究に注目するよりも、クツツエーの創作ノートの精読に基礎を置いている点だ⁽¹⁾。この作業によりまず、『夷狄を待ちながら』と『恥辱』の二作間に続編的な関係性を導き出している。その上で『恥辱』の『今』を「現在」と位置づけ、過去から未来への展望に至るクツツエーの思索を仔細に追いながら、彼が繰り返し何を思索の対象とし、それを作品のなかにどう表しているのかを探索している。このように彼の思索を追うことで見えてくるのは、その思索が一つの核をめぐっているということだ。その核とは「命」である。したがって生と死という、最も根源的かつ普遍的なテーマをクツツエーもまた踏襲している。ただし「他者の命」に重点が置かれる点が、クツツエーをクツツエーたらしめるものだろう。しかもその他者の命は、自らの生とのせめぎ合いのなかに置かれもする。

他者の命とはいかにも抽象的である。それは読み手に応じて意味を変え、ときには「物」にも「無」にもなる。いうまでもなくそこには権力の問題が結びついている。権力は自らの利益に沿って他者を意味づける自由を手中にするからだ。したがって「命」という核は、人種、男女、人間と動物などの間に生じるさまざまな抑圧と非抑圧をその周囲に呼び寄せることになる。そしてクツツエー作品には、抑圧され見失われた他者の命を回復させようとする苦闘が見られる。

「苦闘」という大仰な言葉を用いたのは、他者の命が抽象的であるというからばかりではない。クツツエーの思索はポストモダン思想が切り開いた現実把握のなかにある。この現実においては言葉が真実に——他者はもちろん、自分の真実にさえ——行き着くことはできない。したがって真実を伝達することもできない。このような現実のなかでクツツエーは見失われた他者の命にリアリティー——存在するという真実——を見

出し、言葉でその命を回復させようとする。とすれば彼は同時に伝達機能がすでに失われた言葉に、その機能を改めて付与するという不可能な試みにも挑まなければならないのだ。

本書はこうしたクッツェーの取り組みを、その思索のなかに見つめていく。

クッツェーは本書が過去と位置づけている『夷狄を待ちながら』においても、現在と位置づけている『恥辱』においても、まずは作品の語り手、もしくは語り手に匹敵する人物のなかに暴力における共犯性を追及する。『夷狄を待ちながら』では行政長官、『恥辱』ではデイヴィッドがそうした人物にあたる。とはいえ行政長官もデイヴィッドも知識人であり、あからさまに暴力を振るう人物ではない。しかしそうした人物のなかにこそ、他者を抑圧する暴力の芽が探し出される。いわば特殊な暴力性ではなく、普遍的な暴力性が探求されるのである。そしてその上で彼らの成長のなかに「命」の回復が模索されていく。すなわちこの二作では同様の問題が、同様の形で、異なる時空間において提起され、異なる物語が引き出されているのである。この意味において二作間にある統編的關係性は偶然的ではなく、必然的といえる。そしてクッツェーの命をめぐる思索は、たしかに南アフリカ出身の白人という彼の出自に関連づけ得るだろう。しかし物語はもはや南アフリカの内部にも、西洋の内部にも収まらない。命とそれへの暴力について、生と死についての思索であるかぎり、普遍的に私たちの、私の、物語であるのだ。

* * *

ここで『夷狄を待ちながら』と『恥辱』の受容について、ごく簡単に振り返っておこう。クッツェーは二〇〇二年に南アフリカからオーストラリアへ移住する。ただし『夷狄を待ちながら』と『恥辱』はどちらも